

年の間に平均収量が2.5倍以上に増大した²⁾。1973年には、ダイズはコムギ、トウモロコシを超える第1位の換金作物・輸出農産物となった。このような短期間に画期的な地位を占めるようになった理由として、アメリカが何よりも広大で平坦な大地に恵まれ、農業環境がダイズ生産に適していたことが挙げられるが、多くの優れた人材が試験研究機関を通してダイズのポテンシャルを引き出そうとしたパイオニア力が大きい^{3), 5)}。

現在、ダイズはガルフ湾沿岸から南カナダにかけた平野部で生産され、この中心地は北中部州のアイオワ州、イリノイ州、ミネソタ州、インディアナ州のいわゆるコーンベルト地帯である。多くは一毛作でトウモロコシとの2年ローテーションで生産されるが、数%はコムギ、ナタネ、イネとの二毛作で生産される。生産量全体に占める北中部州の割合は近年になってさらに増大し、最近では8割強がこれらの州で生産され、南部の諸州では減少傾向にある。北中部州の生産量の増大は、主に2.6~2.9t/haに達する増収によるものであり、エリート品種育成による増収傾向は今後も続くと考えられている²⁴⁾。

今日、北米においてダイズの食品利用が増えると見られている。いくつかの大手食品会社において大豆粉、粉末状・繊維状大豆タンパク質などが生産され、人のダイズ製品の直接利用を押し上げているという。また、ダイズはディーゼル油、プラスチックなどの工業素材としての利用をはじめ、インク、農薬、化粧品、ペット飼料など多目的製品の開発利用が増加している²⁵⁾。このことは、2004年の大豆油の非食利用は4%にすぎなかったが、2007年には18%に増加したことからも分かる(Soy Stats 2008)。

3.2 その他のダイズ生産主要国

ブラジルの初期のダイズ栽培の歴史については情報が

少ない。1925年にサンパウロ州でダイズ栽培試験が行われ、その後1950年代までに南部のリオ・グランデ・ド・スール州でアメリカ品種などが試験された。1946年に初めて商業用栽培が行われ、1949年には3万t、1959年には15万t生産された。1960年代には生産量が5倍に増大し、1969年に100万tを超えた。生産の中心地は南部諸州、パラナ州、サンパウロ州などであった。また、1960年代にブラジルで製油産業が立ち上がり、国内でダイズ利用の機運が高まり、1970年代の爆発的な生産拡大を導いた。1970年代までに日本人移民は人口のほぼ1%を占め、同国ダイズの60%を生産した³⁾。こうして、1974年にはブラジルが中国を抜き、世界第2位の生産国になり、1975年には南米(ブラジル+アルゼンチン)がアジア地域の生産量を凌駕した(図1.2.3)。その後、低緯度地域に適応する品種が開発され、1980年代にはミナス・ジェライス州、マト・グROSS・ド・スール州、ゴアス州等のセラードおよびその周辺諸州に生産が急拡大した²⁴⁾。この生産拡大は、1970年代に開始されたセラード農業開発事業に負うところが大きく、日本の農業開発協力によってなされたことはよく知られている。

ブラジルでは、1964年、1998年、2007年にダイズ生産量が50万t、3,100万t、5,800万tと大きく増加し、この間に収量も1.2t/ha、2.4t/ha、2.8t/haと大幅に増大した。このことに見られるように、ブラジルのダイズ生産の大躍進では、生産技術の改良が大きな役割を果たしている。すなわち、Embrapa(ブラジル農業研究公社)の研究者が中心となり、①収量ポテンシャルが高い病害抵抗性の品種改良、②熱帯適応型の品種開発の成功、③酸性土壌の改良および減耕起栽培法の確立などが生産力拡大(収量増)に大きく貢献した。また、特に1980年代に、ダイズの価格が高めに維持されたことの影響も大きい²⁴⁾。

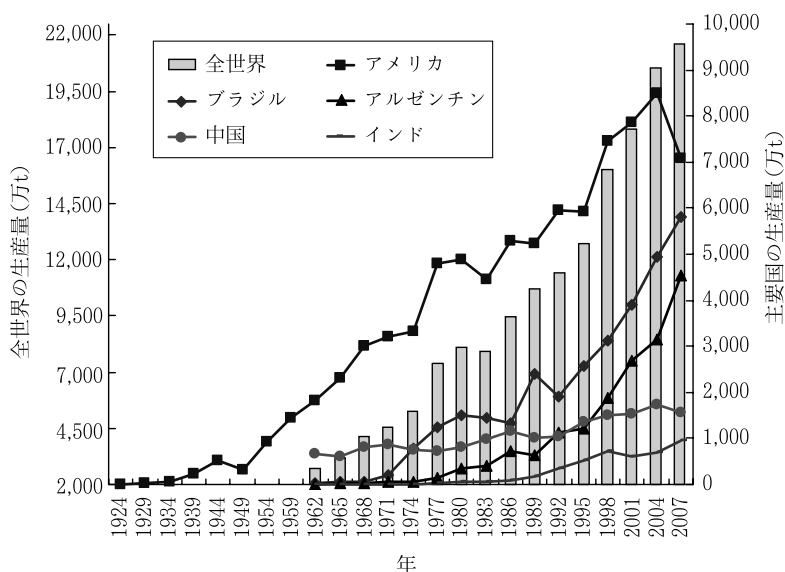


図 1.2.3 ダイズの主要生産国および全世界の生産量の推移

出典：FAOSTAT database(2008)

アメリカの1924~1959年生産量；Probst and Judd(1973)